

# 原発再稼働、周辺自治体の同意も必要

## UPZ研究会で茨城大原口教授が講演

柏崎刈羽原子力発電所から30km圏内（UPZ）議員研究会の第1回研究会が11日、見附市中央公民館で開催されました。

この日は県内各地から34人が集まり、オンライン研修を行いました。また、その後、新安全協定案の策定、住民アンケート、情報発信の3部会も行われ、今後の活動方向などについて協議しました。

オンライン研修は、「『茨城方式』事前了解の意義と課題」と題して、茨城大学人文社会科学部教授の原口弥生さんから講演していただきました。

同教授はまず、「住民の健康や財産を守ることを目的に安全協定が生みだされたこと。法的根拠はないが、国は地域社会における原子力事業者の信頼・透明性の確保の重要性という観点から位置付けていること」「安全協定は時代の流れと共に変化し、自治体はより多くの情報、さらに信頼性の高い情報・事前了解の拡大を求めてきたこと」などを明らかにしました。

次いで同教授は、2018年3月、東海村と周辺5市が、再稼働を行う前に、それぞれ日本原電と事前協議を求められることができる「実質的な事前了解」の権限を明文化した茨城方式新協定の意義、内容についてのべました。そのなかで、新協定では、原発事故の際、影響を受ける地域住民が（再稼働の）意思決定に関与する「正当な当事者」として、周辺5市の

首長、行政、議会、住民が位置付けられていること、再稼働を「了解」するためには、「実効性のある広域避難計画」と「住民理解」が必要であると認識されていることを示しました。

講演後の質疑応答。時どきオンラインが乱れました

が、「茨城での避難幹線道路の整備状況はどうなっているか」「再稼働の判断は専門的知見が必要ではないか」「UPZでの屋内退避をどうみたらいいのか。PAZ（5Km圏内）の住民がスムーズに避難できるようにする手段となっているのではないか」などの質問がありました。答弁のなかで、UPZでの屋内退避に教授も疑問を表明されたこと、「再稼働は関係地域住民のいのちと安全にかかわることなので、住民の声が重視されなければならない」と答えられた点、興味深くお聞きしました。

講演は全体として、とてもわかりやすく、これからの新安全協定案づくりに役立つ内容だったと思います。

各部会での作業ですが、40分ほどしか時間がない中で、精力的な協議が行われました。新安全協定策定部会では、現



在の立地自治体と東電、県内の立地自治体以外の市町村と東電の協定、茨城での新協定を学び、来年5月末までに、30km圏内自治体と東電の間で再稼働の事前了解を盛り込んだ協定案を作り、現行の安全協定のバージョンアップを促すものにしていこうということになりました。情報発信部会では、HPの作成、部内ニュース、住民との意見交換会開催などを検討することが発表されました。



### 【ノコンギク】（再掲）

キク科の多年草。漢字で「野紺菊」と書きます。この時期、低地でも高地でも見かける野菊で、秋の野の花の代表格と言ってよいでしょう。草丈は50センチくらいのもものから1メートルくらいのもものも。花期は8～11月。花言葉は「長寿と幸福」「忘れられない想い」。写真は板倉区山越にて10月13日、撮影しました。



8日の午後は井上さとし参院議員を迎えての街頭演説でした。直江津、高田を中心に市内5か所で行いました。この街頭宣伝には日本共産党議員団も参加しました。

井上議員は、「安倍政権を受け継ぐ管政権は、自己責任押し付けでも、学術会議人事介入でもいっそう暴走している。このまま続けてよいのか」「本気の共闘で本気の政権交代を。日本共産党を伸ばし、統一候補勝利を」と訴えました。力強い演説でした。

### 本気の共闘で 政権交代の実現を

## はしづめ法一の 活動レポート

No.1981 2020.10.18

発行・編集 日本共産党上越市議 橋爪のりかず  
Tel 025-548-3628  
通じないときは 090-5392-1961  
E-mail hasiznyg@ruby.ocn.ne.jp  
URL <http://www.hose1.jp/>



ブログ  
「ホーセの見  
てある記」は  
← こちら

橋爪法一

検索

# 春よ来い 第六二八回 天然の味

柿など秋の果物がおいしい季節になってきました。

先日、用があつて中郷区まで行ってきました。その際、久しぶりにKさんのところにも寄らせてもらいました。

Kさんは、最初、マスクをしていた私が誰だかわからなかったようです。でも、私が左手に持っていたビールを見て思い出されたようです。「あら、橋爪さん、お茶あがつていつてください」と誘われました。

正直言うと、この日、私はKさんに確かめたいことがあつたのです。それは、センナリホオズキを食べたことがあるかどうかでした。

この日、私のワイシャツのポケットには二週間ほど前に吉川区の山間部で分けていただいたセンナリホオズキが三、四個入っていました。玄関先で、そのうちの一個を取り出し、「これ、食べたことあんる？」と尋ねたところ、Kさんは、少し考えてから、「あります、あります」と答えました。それこそ、何十年ぶりで見ても、食べられたでしょう。直径一センチほどの黄色の実を口に入れると、「あまーい」。四角いKさんの顔はまんまるになりました。

居間に上げてもらつてから、Kさんのお連れ合いのSさんにも食べてもらいました。Sさんも食べてすぐに、「うん、あまーい」と言われました。

この日の三人の会話はセンナリホオズキとイチジクの話を中心に食物についての話で盛り上がりました。

Sさんによると、センナリホオズキについては、先日、テレビでも放映していたということですが、でも、大きさは私が持参したものよりもずっと大きかったそうです。

私が吉川区や大島区などで見かけるセンナリホオズキの実は直径一センチから一・五センチほどの大きさで、普通のホオズキに比べて小さく、それこそ一本の莖に鈴なりになり

ます。テレビで放映されたものは多分、改良されたものだと思います。

Kさんは、お茶とともにSさんが育てたというイチジクを四個出してくださいました。今年、イチジクを食べるのは妻の実家で食べて以来二度目です。一番大きなものは遠慮して、二番目に大きくて、おいしそうなイチジクを一個いただきました。もいだけばかりのイチジクだったのでしょつか、とてもジューシーで口の中に甘味が広がりました。

Sさんは果樹を育てるのが大好きです。イチジクもそうした木の一つでした。今年イチジクの木がカミキリムシにやられて苦労したそうです。それでも昔ながらの味の実を収穫でき、この日は何軒かの家におすそ分けしたとのことでした。

びっくりしたのはKさんの農業への情熱です。Kさんは藤沢から片貝に嫁いだ人で、いま八十代の半ば。田んぼは二年前にやめました。テレビでごろんになったのでしょつか、「稲刈りボランティアの人には稲まるけなどもっとしっかり教えた方がいいね」などと気にされています。馬に鋤(すき)をひかせて畑起こしを行い、それが牛に変わった当時のことや近くの山でゼンマイなどの山菜採りをしたことについても熱く語っていたきました。

Sさん、Kさんとの話で気持ちが一つになったのは、地元でとれる果樹や山菜などの自然の食べ物、天然の味の大切さです。Sさんは、「山菜はいいね」「吉川区ではフラビが(採られないで)たくさんあって驚いた」などと言われました。私からも、「センナリホオズキの甘酸っぱさは一級品だ」「ウドは山にあつてこそいい味が出る」などといった話をしました。

新型コロナウイルスで人間らしい生活のあり方が問われているいま、もっと身近な食べ物に目を向けてもいいのではないでしょいか。

## 桜の最後の瞬間まで見守っていききたい



高田城址公園内の桜の老木の近くにある看板です。「桜の"経過観察"を行なっています」というタイトルの下に書かれた説明文がわかりやすく、桜への想いが伝わってきます。

特に最後の2行、「1年でも長く花を咲かせ、私たちを楽しませてくれることを願い、桜の最後の瞬間まで見守っていききたいと思います」が素晴らしい。

都市整備課のどなたが書かれたのでしょうか。



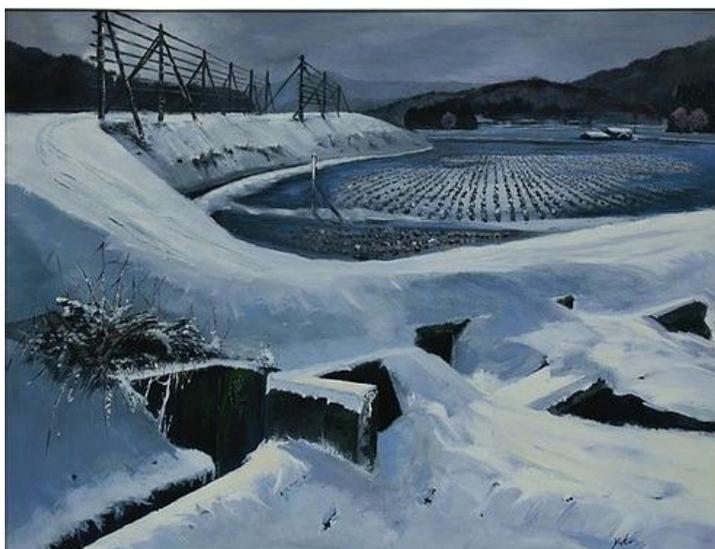
## 上越地域各消防署における空間放射線量率測定結果

測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。

消防署によると、通常は1時間当たり0.016~0.16μSv(マイクロシーベルト)だとのこと。

	10月7日(水)	10月14日(水)
上越南消防署	0.047	0.050
上越北消防署	0.047	0.050
新井消防署	0.047	0.040
頸北消防署	0.050	0.053
頸南消防署	0.053	0.057
東頸消防署	0.053	0.050
名立分遣所	0.053	0.057
高士分遣所	0.050	0.057

## 柏崎市美術展で渡辺幸雄さんに日報美術振興賞



柏崎市の今年度の美術展洋画部門で、当市の渡辺幸雄さんの作品、「冬の用水路」が「新潟日報美術振興賞」を獲得しました。

講評では、「冬の雪景色が、構成的にも、色彩的にも、とてもすばらしい。手前の白の中の黒の配置が、全体をひきしめている」とありました。